

演題名

小乳頭により授乳困難が予想された母親乳首の口腔内形態変化の観察

林 良寛¹⁾・大杉 佳美²⁾・斉藤 哲²⁾

石心会さやま総合クリニック小児科¹⁾ ピジョン株式会社中央研究所²⁾

抄録本文

【はじめに】

今回我々は、超音波断層撮影（以下エコー）を用いて、小乳頭の母親における哺乳中の児の口腔内形態観察を行う機会を得たので報告する。

【症例】

P社モニター制度に登録し、母乳哺育中の17週齢女児(G. A. 38週6日、出生体重3,102g、観察時体重5,700g、第1子)。母親より「右乳頭が陥没気味であり、右乳首での授乳に不安が強い」と訴えがあった。文章による同意を得て、母親乳頭・乳首サイズの計測後、下顎および頬部より、矢状断と水平断を観察した。装置はALOKA Prosound α7、10MHzの小型コンベックスプローブを使用した。母親は画面を観察でき、撮影者が随時、画像の説明を行った。授乳前の乳頭・乳首サイズは、右乳頭縦5.1mm、横3.6mm（乳頭直径4.35mm）、高さ5.4mm、左乳頭縦13.4mm、横15.2mm（乳頭直径14.3mm）、高さ13.5mmであった。矢状断では、左右とも乳首は口蓋側で固定され、舌側の波動運動により波状にしぼられる様子が確認できた。口腔内での乳首直径は、左は最大11.8mm、最小6.67mm、右は最大11.24mm、最小7.52mmとなった。水平断では、左右とも乳首が咽頭奥に引き込まれる様子と左右両側方向から搾られる様子が確認できた。

【考察】

陥没・扁平乳頭や短乳頭は、成書においても直接授乳困難が指摘されており、授乳に抵抗を感じる母親は多い。今回我々は、小乳頭であった右側乳頭での児の口腔内の形態変化は、正常乳頭と考えられる左側とほぼ同様であったことが観察できた。さらに、その形態変化を母親が画面を観察できたことにより、「右の授乳に不安があったが、左と同じで安心しました」と、授乳に対する不安を軽減できたと考えられた。今後は、観察例を増やし、母親が哺乳を観察できるエコーを用いた授乳評価方法を確立することで、授乳指導に供与していきたい。